

形態的統語的形式における規則性と イベント連鎖のスキーマ

高 尾 享 幸

0. はじめに¹

認知言語学は、言語知識の記述や説明に言語以外の認知領域で認められる一般的な心理学的概念を参照することが不可避的である、ということを基本的主張としている。これは、言語知識の実質的な内容（例えば、音韻論、形態論、統語論、意味論における構成単位や規則や原理）に言語とは独立に確認される認知的概念が「介入」する、と主張していることになる。言語知識の中で言語外の認知的特徴がもっともよく確認できるのが意味においてであるため、これまで認知言語学的な研究では、主として言語の意味構造に見られる認知的特徴が研究されてきた。このような基本的立場からは、意味と形式の対応関係について次のような一般的な予測を立てることができる。言語の意味は、言語で参照される認知的概念により特徴づけられ、そのような認知的性質をもつ意味構造と結び付いた言語の形式的構造は、意味の認知的特徴を参照した条件により制約されることがあり得る。本論では、これまでの研究から、この予測が正しいと思われることを示したい。そのために、特に慣用的に自然と認められるイベント連鎖という概念と形態的、統語的形式の規則性について考察する。次節から、英語における等位構造制約の例外、連続するプレーの実況に使われる英語の現在時制、意外性を表すスペイン語の再帰接辞、アランブラック語などの連鎖動詞、日本語の名詞修飾節を順に取り上げ、それぞれの構文の生起可能性を適切に述べるには、慣用的に自然なイベント連鎖という概念に言及する必要があることを述べる。そして、6 節では、慣用的に自然なイベント連鎖という概念が、言語以外の認知においても参照されていることを示す事実を指摘する。

1. wh 移動に対する等位構造制約の例外とスキーマ

英語において等位構造内の一つの等位項に対してのみ統語規則を適用することができない、ということはよく知られている。この条件は Ross (1967, 1986) により指摘されたもので、

「等位構造制約」(Coordinate Structure Constraint) と呼ばれている。それによれば, [XP and YP] あるいは [XP or YP] という等位構造の XP あるいは YP (もしくは, その一部) だけにあ
る統語規則をかけることは許容されない。たとえば, (1) のように片方の等位項だけを wh 移
動するとその文は非文となる。等位構造に対して wh 移動のような規則を適用するには, (2)
のように, そこに含まれるすべての等位項に対して規則を一律適用しなければならない。

- (1) a. * Which trombone did [the nurse polish ____] and [the plumber computed my tax]?

(Ross 1967/1986)

- b. * Who did Harry [hit Bill] and [kick ____]?

(Lakoff 1986)

- (2) Students [who ____ fail the final exam] or [who ____ do not do the reading] will be
executed.

(Ross 1967/1986)

ところが, Ross自身も指摘しているように, 等位構造制約には例外が存在する。等位構造
制約を破って単一の等位項のみに規則が適用されているにもかかわらず, 容認可能とされる
文が観察される。たとえば, (3a) では, 二つの等位項のうち後のほうの等位項の一部が wh 移
動されており, (3b) では前のほうの等位項に含まれる目的語名詞句が wh 移動を受けている。
しかし, それにもかかわらず, これら二つの文はいずれも容認可能と判断される。

- (3) a. What did Hary [go to the store] and [buy ____]?

- b. How much can you [drink ____] and [still stay sober]?

(Lakoff 1986)

等位構造制約は句構造の配列型ならびにそこに含まれる等位接続詞によって指定される統語
的な構造のみに基づいて定められる形式的な一般条件であるため, もし (3) の文の問題の構造
が統語的に等位構造であるとする, それらの文は等位構造制約を例外的に免れていること
になる。Lakoff (1986) は, (3) における問題の構造が統語的な等位構造を成していることを示
す事実として, and という等位接続詞により二つの動詞句が連結されているということのほか
に, and によりつながれる構成素は二つに限定されず, いくつでも連結することができること,
さらに, そのような複数の構成素が連結された構造は, 典型的な複数項の等位構造と同様,
コンマ・イントネーションを受けること, また, 問題となる連結された構成素すべてに一律
に規則を適用することができることをしている。たとえば, (4a, b) では三つ以上の構成素が連
結されている。また, (4c, d) では wh 句が対応するすべての等位項に対して移動規則が適用さ
れている。

- (4) a. Sam is not the sort of guy you can just sit there, listen to, not want to punch the nose.
 b. This is the kind of brandy that you can sip after dinner, watch TV for a while, sip some more of, work a bit, finish off, go to bed, and still feel fine in the morning.
 c. What did you store, buy, and load in his car, drive home, and unload?
 d. How many courses can you take for credit, still remain sane, and get all A's in?

(Lakoff 1986)

これらの事実は、いずれも (3) の文が統語的な等位構造を含むことを示している。したがって、それらの文では、等位構造に対して統語規則が適用されているのに、等位構造制約の効果が現れていないということになる。

問題となるのは、どのような場合に、(3) のように、等位構造制約が無効とされるのかである。Lakoff (1986) の分析によれば、等位項への非一律的な規則適用が例外的に許されるのは、等位構造により表されるイベント連鎖が特定の概念的な「型」に合致する場合である²。そのようなイベント連鎖の概念的な型として、イベント連鎖の二つのタイプがあげられる³。第一のタイプのイベント連鎖は、Aシナリオと呼ばれ、自然な、一般に慣用化した知識に基づく期待に合致した時間的展開をもつイベントの連鎖を表す。第二のタイプは、Bシナリオと呼ばれ、慣用化した知識に基づく期待とは反する展開をもつイベント連鎖を表す⁴。二つのシナリオを具体的に理解するために、再び (3) の文を考えてみよう。(3a) の動詞句全体が表すイベント連鎖は「店に行き」そして「何かを買う」というもので、これは慣用化した知識に示されるイベント連鎖と考えることができるだろう。したがって、このイベント連鎖はAシナリオである。(3b) の動詞句が表すイベント連鎖である「たくさん酒を飲み」そして「しらふでいる」というのは、慣用化した知識に含まれる典型的なイベント連鎖とは合致せず、むしろそれに相反する。したがって、これはBシナリオである。それに対し、(1) の文では等位構造が表すイベント連鎖はいずれのシナリオとも解釈することができない。そのため、(1) では等位構造制約は無効化されることがなく、一方の等位項のみへの規則の適用は許されない。

このように、等位構造により表されるイベント連鎖がAシナリオやBシナリオであるか、あるいは、いずれでもないかを決定するには、慣用的に期待されるイベント連鎖の知識が参照される。慣用的に期待される典型的なイベント連鎖を表す概念構造は、スキーマやスクリプトと呼ばれる知識構造として認知心理学や人工知能研究において認められており、記憶や行動の制御のような言語外の認知活動において使われると言われている。本論では、そのような概念構造を便宜的に総称してスキーマと呼ぶ。(1) や (3) では等位構造の意味がスキーマに基づいて上述の二つのシナリオのいずれかに合致しているか、いないかという特徴付けが与え

られる。そして、その特徴付けに基づいて等位構造内の等位項に対して非一律的な wh 移動の適用の可否が区別されている。このことは、言語の統語部門は、文の音形式とそれが表す意味概念とを仲介する働きをするが、統語規則の適用の仕方は意味概念側において定められる条件により決められることがあることを示している。しかも、上述の場合において重要となる意味的概念は、慣用化した期待に合う典型的なイベント連鎖であるが、これは語彙項目の意味と統語構造とか算出される合成的意味とは性質が異なる。典型的なイベント連鎖を表すスキーマは長期記憶に収められ、言語以外の認知領域においても使われるが、個々の文の合成的意味は長期記憶に収められているとは考えられていない。したがって、等位構造制約の例外となる統語規則の適用を規定する意味概念側の条件は、単に文法により定められる意味内容だけ見れば規定できるものではなく、スキーマという認知的概念を参照することによらなければ適切に記述することができない。

これまで、等位構造制約の例外となる統語規則適用の可能性は、Aシナリオ、Bシナリオと呼ばれるタイプのイベント連鎖に基づいて決まることを見た。このことから、各等位項が表すイベントの時間的順序によって、その等位項を含む等位構造に対する規則適用の可能性が変わることがある、とすることができる。そして、等位項が表すイベントの時間的順序は、その等位項の相対的位置により決まる⁵。たとえば、[VP₁ and VP₂]という等位構造においては、VP₁が表すイベントはVP₂が表すイベントよりも時間的に先行すると解釈される⁶。したがって、等位接続された動詞句を入れ換えると、表されるイベントの時間的順序が変わり、そのため、AシナリオでもBシナリオでもなくなることが起こりうる。その場合、動詞句の順序を入れ換える前には等位構造制約の例外であったのが、動詞句の順序を変えた後にはそうではなくなり、文は非文となることが上の分析から予測される。この予測は、(5a, b)に示すように、正しいことが確認される。

(5) a. * Which store did Hary [buy a computer] and [go to ____]?

b. * What can you [stay sober] and [drink ____]?

(5a) は (3a) の等位接続された動詞句の順序を互いに入れ換えて、片方の動詞句にのみ wh 移動を適用した例に相当し、(5b) は (3b) に対し同様のことを行って作った例である。いずれの文も、イベントの順序という概念的要因が等位構造への非一律的な統語規則の適用可能性に重要であるという上述の分析の通り、不適格となる。というのは、コンピュータを買って、そしてどこかの店に行くというイベントの連鎖は、もはや慣用化された知識に基づいて予測されるものとは考えにくく、また、しらふのままでいて、そして何かを飲むというイベント連鎖は、

もはや慣用化された知識に基づく予測の反対と考えることも不自然であるためである。

さらに、話者がより特殊なスキーマをもっている場合には、一般的には不適格と判断される文も容認可能となることが報告されている。(6)の文は、一般的には、不適格と判断されるが (Lakoff 1986), Johannessen (1998) によれば、以下のような特殊なコンテキストでは使うことができる。メアリは軽い精神障害をもっており、誰かがハーブを食べるときには必ず動物を見る習慣を持っており、しかも、食べるハーブの種類に応じてメアリはそれぞれ違った動物を見る。このようなことを知っている話者は、(6)の文を使うことができる。

- (6) * What kind of herbs can you eat and Mary see a mouse? (Johannessen 1998)

このことは、話者がイベント連鎖に関してどのような知識を慣用化させて持っているかということが、等位構造制約を破る規則の適用の可能性に影響することを示している。上述のような(言語外の)知識を持っていなければ、(6)のような文を不適格と判断するが、いったんそのような知識を獲得すれば、(6)のような文を使うことも可能になるのである。

興味深いこととして、ある等位構造がAシナリオかBシナリオかのどちらに合致しているかにより、wh 移動の適用の仕方が異なる (Lakoff 1986)。Bシナリオに合うイベント連鎖を表す等位構造では最後の等位項から wh 句を移動しても良いし、それ以外の等位項から wh 句を移動しても良い。

- (7) a. What forms of cancer can you [eat herbs] and [not get ____]?
b. How small a meal can you [eat ____] and [feel satisfied]? (Lakoff 1986)

それに対して、Aシナリオに合致する等位構造では、最後の等位項から要素を移動しなければ不適格な文となる。つまり、規則適用の的として、最後の等位項が必ず含まれていなければならない。このため、最後の等位項からの移動を含まない(8b)の例は、容認されない。

- (8) a. Who did he [pick up the phone] and [call ____]?
b. * How big a meal did he [eat ____] and [feel satisfied]? (Lakoff 1986)

このような事実から、Lakoff (1986) は (9) に示す一般化を立てている。

- (9) 最終等位項制約 (Final Conjunct Constraint):

Bシナリオだけが、最終等位項からの抜き出しが行われていないことを許す。

この制約は、等位構造制約の例外は意味的な従属接続という概念を使って記述できるとする分析にとって問題となる。等位構造制約の例外となる事例は、統語的には等位的な構造が意味的には従属的な関係を持っているために、等位構造制約の効果が現れないと考えられる。この考えによれば、等位構造制約は Ross (1967/1986) で述べられているような統語的な条件ではなく、意味的条件であって、文の意味構造において働くと考えられる (Culicover and Jackendoff 1997を参照)。この分析は、AシナリオとBシナリオという区別を設けず、意味的従属接続という統一的な概念で等位構造制約の例外を記述できるとする点で、Lakoff (1986) の分析とは異なる。いま、(7a, b) と (8a, b) の意味構造を、それぞれ概略 (10a, b) と (10c, d) であると仮定する。

- (10) a. WHAT FORMS OF CANCERS CAN YOU NOT GET ___ IN SPITE OF EATING HERBS?
 b. HOW SMALL A MEAL CAN YOU FEEL SATISFIED WHILE EATING ___?
 c. WHO DID HE PICK UP THE PHONE IN ORDER TO CALL ___?
 d. HOW BIG A MEAL DID HE EAT ___ SO THAT HE FELT SATISFIED?

(10) に示した意味構造では統語的な等位構造はすべて意味的には従属構造であると解釈されている。したがって、上述の分析ではこれらの例には（意味的とされる）等位構造制約の効果は現れないとされる。(10a, b) は、意味的に従属構造を成してさえいれば、意味的主節、意味的従属節どちらからの移動も許されることを示している。(10b) と同様、(10c) では従属節からの移動を含む。ところが、(10d) は、(10a) と同様に、主節からの移動を含むが、すでに見たように対応する (8b) の文は不適格である。したがって、この場合は意味的主節からの抜き出しが禁止される。したがって、(9) の一般化をとらえるためには、単に意味的従属接続だけではなく、二つのシナリオを区別を認める必要がある。

2. 連続するプレーの実況に用いられる現在時制

英語において動詞の現在形の一つの用法として、現在時制があるスポーツの試合などでの連続するプレーの実況 (play-by-play report) に使われる場合がある。

- (11) a. He swings. He misses. (Michaelis 1998)
 b. McHale passes to Bird. Bird moves to 3-point range. He shoots. He buries it!
 (Langacker 1991)

(11) のような文では、例えばアナウンサーのような発話者は、発話時と時間的に一致する出来事を述べているのではないが、できるかぎり短い遅れで出来事を報告しようとしている。連続するプレーの実況において現在形が使われる背後にある意味的な動機付けについては、いくつかの分析があるようである。たとえば、Langacker (1991) は、この述べ方が使われる場合、発話者は描写される出来事が発話と同時的であると概念化しているためである、と述べている。また、Michaelis (1998) は、描写される出来事の内部構造が捨象されて瞬時的な出来事と解釈されるために現在形が使われる、と論じている。

この現在形の用法は、どのような出来事を表す場合にも可能であるわけではない。たとえば、次のような文は、この用法の現在形が使われているために、不適格となる。

(12) a. Jones hits a high fly to left field. Ryan chases it. ??A streaker appears on the field.

(Michaelis 1998)

b. * The scoreboard explodes !

(Langacker 1991)

Michaelis (1998) や Langacker (1991) によれば、連続するプレーの実況において使われる現在形の動詞が表す出来事は、スキーマ化された出来事でなければならない。この用法の現在形が使われるのは、特定のスキーマの中に含まれており、起こることが通常期待される出来事に対してのみである。そのスキーマに含まれない、通常期待されることがないような出来事は、この用法の現在形を使って表されることはない。上記 (12a) では、三番目の文が表す出来事は、野球の試合において通常起こることが期待される出来事ではない。同様に、(12b) の文も、野球の試合で起こるとは期待されることがないような出来事である。そのため、この文は、アナウンサーが試合の実況において用いる表現としては不適格である。このように、スキーマ化された通常その生起が期待されないような出来事は、連続するプレーの実況を表す現在形を用いて描写されない。このことは、動詞の時制を示す形態論的な形式の生起に対して、スキーマに基づく意味的条件が課せられていることを示している。連続するプレーの実況に使われる現在時制とは、現在形接辞という形態論的文法形式が、上述の意味内容と規則的に結び付くということである。(12) に例証された事実から、この意味と形式との結び付きには、慣習的に期待されるイベント連鎖のスキーマに基づく条件により制約されていることが分かる。

3. スペイン語の再帰接辞 se

これまで形態論，統語論における規則性には，スキーマ化された自然なイベント連鎖という概念により制約される例があることを英語から見てきた。しかし，スキーマにより言語形式が制約されるのは英語の特定の現象の限られることではなく，他の言語の異なる種類の現象においても観察されることが報告されている。このことは，人間の言語がスキーマ化されたイベント連鎖という複雑な言語外知識により制約を受け得るものであることを示唆している。本節からは，そのような英語以外の言語の事実を見ていく。最初に，スペイン語の再帰接辞の一つの用法について考えたい。

Maldonado (1992) は，スペイン語の再帰接辞 se は，同じ主動詞と共に用いられても，生起することが禁止される場合と要求される場合とがあることを指摘している。

(13) a. En el otoño, las hojas (*se) caen de los árboles.

(秋には，葉が木から落ちる)

b. En la primavera, las hojas *(se) cayeron de los árboles.

(春に，葉が木から落ちた)

(Maldonado 1992)

(13a) では se は生起できず，仮に se が用いられても非文となる。反対に，(13b) では se の生起が要求され，もしも se が脱落すると不適格になる。Maldonado (1992) によれば，再帰接辞 se は自然な期待に反するイベントを表す文において義務的に生起する，と論じている。この自然な期待はスキーマ化された通例のイベント連鎖という知識に基づいていると考えることができる。たとえば，上述の (13a) では，秋になるという季節の変化とそれに続く落葉は，通例のことでありスキーマ化されていると考えられるイベント連鎖が含意されている。ところが，(13b) が含意している春になり落葉するというイベント連鎖は，通例起こらず，そのため慣用化してスキーマとなっているとは思われない。この違いが，se の生起と相関している。つまり，スキーマに基づく期待に合致する場合は se は使われず，それに反する場合に se が要求される。同様のことは次の例にも当てはまる。

(14) a. Con el agua así de caliente hasta los pantalones de polyester (*se) encogen.

(こんな熱いお湯だと，ポリエステルズボンでも縮んでしまう)

b. A pesar de que estos pantalones son prelavados, *(se) encogen.

(このズボンは前洗いされているのに，(思いがけず) 縮んだ)

(Maldonado 1992)

熱い湯の中で衣服を洗うとそれが縮むことは通例期待されるイベント連鎖であるため、(14a)では se が生起することはない。それに対し、前洗いしたのにその衣類が洗濯で縮むことは通例の期待に反するイベント連鎖であるから、(14b)では se の生起が義務的となる。

スペイン語の再帰接辞 se の生起には、上述の例からも示唆される通り、単に通例期待されるイベントの順序だけが関与するのではなく、付帯状況や行為の様態も関係してくる⁷。たとえば、

(15) a. Juan (*se) cayó al agua con toda elegancia.

(ジュアンは華麗に水に飛び込んだ)

b. Juan *(se) cayó al agua vestido.

(ジュアンは服を着たまま水に飛び込んだ)

(Maldonado 1992)

スキーマには単にイベントの順序だけではなく、イベントの参加者の特徴や参加者が行う行為の様態という情報も含まれていると考えられる。例えば、レストランで食事をするというスキーマには、給仕係がどのような服装をしているかや注文を取るときにどのような態度を示すかなどの情報が含まれていると言えるだろう。したがって、(15)に示したように、付帯状況や行為の様態が se の生起可能性と関連していることは、上述の分析から説明できる。

4. 連鎖動詞

スキーマ化された自然なイベント連鎖という概念が関与すると思われる他の構文形式として、次にいくつかの言語の連鎖動詞 (serial verb) 構文を見たい。アランプラック (Alamblack) 語には、連続するイベントを表す形式として節の連結以外に連鎖動詞構文がある。この言語では、節を連結した複文の場合とは違い、連鎖動詞構文は、日常の経験において自然だと認められるイベント連鎖しか表現することができない。Bruce (1988) によると、アランプラック語を話す人々の社会において、木に登って虫を探すというイベントは自然に期待されるイベント連鎖であるが、わざわざ木に登って星を見るというのはそれほど自然なイベント連鎖とは考えられない。というのは、星は地面から見るのが普通であるためである。(16)に示す様に、この違いは連鎖動詞構文の可能性に対応している。

(16) a. miyt ritm muh-hambray-an-m

tree insects climb-search. for-1S-3PL

(私は木に登って、虫を探した)

b. * miyt guñm muh-hëti-an-m

tree stars climb-see-1S-3PL

(私は木に登って、星が見えた)

(Bruce 1988)

不自然なイベント連鎖が連鎖動詞構文により表されているために、(16b) が不適格となっていることを支持する事実(17)がある。通例星を見るのは地面からであるが、木に登ると星がよりよく見えるようになることは自然なイベント連鎖である。したがって、(16b) に副詞的表現 *marña* (よく) を加えた(17)は、容認度が上がる。

(17) miyt guñm muh-hëti-marña-ann-m

tree stars climb-see-well-1S-3PL

(私は木に登って、星がはっきりと見えた)

(Bruce 1988)

同様のことは、連鎖動詞を持つ他のいくつかの言語においても観察される (Durie 1998)。(18a) はスラン語 (Sranan) の例である。この文では、魚を捕り、それを売るというイベント連鎖が連鎖動詞構文により表現されている。これは自然なイベントの展開であり、スキーマ化されていると考えてもよいだろう。なぜなら、地域ごとの市場において人々が収穫したものを売買する社会では、食べ物を買ったり売ったりすることは慣習的に行われるイベントであるからである。ところが、連鎖動詞構文の後項を「買う」を意味する動詞に変えると、そのようなイベント連鎖の自然さは失われる。そのため、(16b) のように、それを表すのに連鎖動詞構文を用いることはできない。

(18) a. a teki a fisi seri

(s)he take the fish sell

(彼女は魚を捕って、売った)

b. * a teki a fisi seri

(s)he take the fish buy

(彼女は魚を捕って、買った)

(Durie 1998)

これと似たことが、ヨルバ語 (Yorùbá) にも見られる。食べ物を食べて、寝るというのは、日常的な出来事であり、スキーマ化された自然なイベント連鎖と考えられるが、食べ物を食べて戻るというのはそうではない。そのため、前者のようなイベント連鎖は連鎖動詞構文により表現可能であるが、後者のようなイベント連鎖はそれができない。

(19) a. ó jẹun sùn

he ate sleep

(彼は食べて、寝た)

b. *ó jẹun padà

he ate return

(彼は食べて、戻った)

(Durie 1998)

前節と同様、連鎖動詞構文の可能性は単にイベントの順序がスキーマに基づいて自然であるかどうかだけでなく、あるイベントの付帯状況が自然であるかどうかによって決まる場合もある。ホワイト・モング語 (White Hmong) を話す人々にとって、竹笛を吹くこととダンスをすることは切り離すことができない。というのは、竹笛を吹くとかならず、その人の足や身体が音楽に合わせて動いたり揺れたりするからである (Durie 1998)。

(20) nws dhia tshov qeej

3SG dance blow bamboo.pipes

(彼は笛を吹きながら、踊った)

(Durie 1998)

(20) において、ダンスを踊るイベントと竹笛を吹くイベントとは時間的に連続しているのではなく、同時に行われていると解釈される。したがって、この場合、連鎖動詞の使用によって問題になるのは、イベント連鎖の自然さではなく、二つの同時的なイベントの付帯性の自然さである。

5. 日本語の名詞修飾節

最後に、日本語の名詞修飾節について簡単に考察する。日本語の名詞修飾節には、英語に

において名詞修飾の働きをする節である関係節のように、動詞の項のうちの一つが修飾を受ける名詞に対応するものもある。たとえば、(21a) では、動詞「あげる」の項の一つ（すなわち、受け手）が関係節内では空所になっており、それが主要部の名詞「学生」に対応する。この点については、対応する英語の関係節構文である (21b) と共通している。

- (21) a. [先生が ____ 本をあげた] 学生
 b. the student [the teacher gave the book to ____]

ただし、日本語の名詞修飾節においては、空所（あるいは、主要部名詞）と修飾節の動詞との意味的な関係を示す形式が生起することはない。たとえば、(21b) では、前置詞 to が存在しており、ギャップと関係節の主動詞 gave との意味的な関係を明示的に表している。ところが、対応する日本語の表現である (21a) には、そのような表現は存在しない。このことは、(21a) の名詞修飾節に対応する完全な文である (22) と比較するとよりはっきりする。そこでは、動詞と受け手項との関係を示す格助詞「に」が生起している。

- (22) 先生が学生に本をあげた。

(21a) のような場合では、関係節化に伴って格助詞「に」を削除する統語操作が適用されることが考えることも可能である。しかし、日本語の名詞修飾節構文には、単に文法形式の削除によっては処理できないような例も存在する (Matsumoto 1997)。

- (23) a. [夜トイレ行けなくなる] 話
 b. [翻訳した] 金

(Matsumoto 1997)

(23) に挙げた例では、統語規則により削除されたと考えられる要素を画一的に復元することはできない。

Matsumoto (1997) は、日本語の名詞修飾節構文においては、世界に関する知識 (world view) が関与していると分析している。それによれば、名詞修飾節と主要部名詞との意味的な関連は、世界に関する知識に基づいており、それにより許容される解釈が与えら得る場合にはその名詞修飾節構文は適格とされるが、世界に関する知識に基づいて解釈が与えられない場合にはその名詞修飾節構文は不適格となる。この語用論的条件に相関して、主要部名詞と関係

節との意味的關係は統語的あるいは形態論的形式により明示的に示されていない。たとえば、次の一組の文を見てみよう。

- (24) a. [頭が良くなる] 本
b. ?? [頭が良くなる] 車

(Matsumoto 1997)

(24a) では、本を読むと、頭が良くなるという因果関係的なイベントの連鎖が、慣用化された知識としてわれわれの世界に関する知識の一部を構成している。そのため、それに基づいて名詞修飾節と主要部名詞との意味的な関連が保証され、その構文は適格とされる。それに対し、(24b) の名詞修飾節と主要部名詞との意味的な関連を保証するイベント連鎖は、われわれの世界に関する知識の中から取り出すことは一般にできない。そのため、(24b) は適切な解釈が与えられず、容認されない。Matsumoto (1997) は、世界に関する知識という概念を本論での自然なイベント連鎖という概念に限らず、広い意味で使っているようだが、少なくともその一部として本論で扱った自然なイベント連鎖を示すスキーマが含まれていると思われる。このことは、(24) に挙げた例によっても明らかである。

6. 認知的基盤

これまで見てきた構文では、その形態・統語形式に関する一般化を適切に捉えるためには、自然なイベント連鎖という複合的な概念に言及する必要がある。この概念は、しばしばスキーマ（あるいはフレーム、スクリプトと呼ばれる⁸）心理学的概念と極めて類似している。それらは特定のタイプの場面において日常の出来事で行われる行為の典型的な連鎖を表示する知識構造を指す (Eysenck & Keane 1995)⁹。複合的なイベント連鎖を表示するスキーマにおいて、各イベントは時間的もしくは因果的に順序づけられており、そのイベントに典型的に関与している参加者や参加物、また場所が含まれる。スキーマは認知的な概念であり、記憶や行動の制御や物語の理解といったさまざまな認知活動において参照されていることが実証されてきている (Eysenck (ed.) 1990, Eysenck & Keane 1995, Stillings, et al. 1995, Gleitman 1996)。記憶などの認知活動に見られるスキーマの特徴の中には、スキーマが通常期待されるイベントの展開に関する情報を含んでいることを示すと考えられるものがある。一つは、実際には情報として与えられなくても、ある場面で典型的に起こる出来事についての情報を人々は「記憶」していると実験において報告することである。例えば、歯医者に行ったことについて

聞いた被験者は、与えられた話しには言及されてなくても、最初に受け付けを済ませて、その後待合室で雑誌を読むといった歯科医院で典型的に行われる一連の行為を記憶している事柄として報告する。Schank & Ableson (1977) には、以下の短い物語を被験者に聞かせて、後にその物語についての質問をするという実験について報告されている。

- (25) Terence got on a bus to go to work. He sat down. When the conductor came, he realized that he had left his money at home, so he had to walk to work.

それによれば、「車掌はテレンスに切符を渡しましたか」という質問に対し、その答えが (25) には記述されていないにも関わらず、被験者はほとんど難なく答えることができた。

これらのことは、われわれは与えられた情報には欠落している部分にデフォルト情報を補う、ということを示している。われわれは、デフォルト情報を表示する知識を記憶として収めているのである。スキーマに含まれる情報を記憶に混入させることは反対に、スキーマには合わない期待外のイベントを含む情報が与えられた場合、後に記憶からそれを報告するとき期待外の情報が削除されたり、スキーマに合う期待に沿った情報に変形されることもある。つまり、人間の記憶は期待に合うように標準化されることがある。重要なのは、記憶におけるデフォルト情報の供給においても、記憶の標準化においても、供給されたり、削除されたり、変形されたりするのは、通例期待されるイベントの連鎖に合うように情報であるということである。このことは、記憶においてステレオタイプ化したイベント連鎖についての知識が関与していることを示している。

7. 考察および結語

本論で述べてきたように、いくつかの言語の特定の構文のなかには、その形態的あるいは統語的一般化を捉えるために、慣用的に自然とみなされるイベント連鎖という複合的な概念を必要とするものがある。また、慣用的に自然とみなされるイベント連鎖の概念は、文法において言及されるだけでなく、言語以外の認知活動においても利用されている。このように、形態論や統語論という文法の形式側の部門は、(少なくとも一部分) 認知に対して開かれており、認知と相互作用している。

本論で見た限りでは、慣用的に自然とみなされるイベント連鎖という認知的概念が文法形式を制約するのは、特定の構文に限られている¹⁰。この点で、動詞の意味的な項構造が統語的な項構造を決定するというような、構文を越えた一般的な制約とは異なる。

注

1. 本論は1997年6月22日に上智大学で開かれた第12回上智言語学会シンポジウムにおいて発表した論文の一部分に基づいており、それに改訂と追記を行ったものである。
2. この種類の等位構造制約に対する例外が見られるのは、動詞句が等位接続されている場合に限られるようである。次の例を見ると、節が等位接続されている場合には、等位構造から要素を移動すると不適格な文になることが分かる。

- (i) This is the TV program that John [came home] and [watched ___ every night].
- (ii) ?? This is the TV program that [John came home] and [he watched ___ every night].

3. Deane (1991, 1992)では等位構造制約に対する例外的事例についてさらに詳細な意味的な分類が示されている。そこでは、等位構造制約の例外は、それぞれ予備的行為、場面設定、内在的原因、付随的イベント、期待の否定、結果を表す等位項を含むと区別されている。
4. Lakoff (1986) は次のような例を挙げて、等位構造制約の例外となるような規則適用が可能になる第三のタイプのシナリオを指摘している。

That's the stuff that the guys in the Caucasus drink and live to be a hundred.

Lakoff (1986) はこのシナリオを原因・結果を表すシナリオと特徴づけている。例えば、上記の例は、「コーカサスの酒を飲むために、100歳まで長生きをする」と解釈される。この第三のタイプの実事に関しては、本論では扱わない。

5. and により結ばれた二つの動詞句の間に時間的順序が含意される場合、and に先行する動詞句の方がそれに後続する動詞句よりも時間的に先行するイベントを表すことを支持するものに、次の例がある。

- (i) The lone ranger jumped on his horse and rode into the sunset. (Levinson 1983)
- (ii) ?? The lone ranger rode into the sunset and jumped on his horse. (Levinson 1983)

例文 (ii) が不自然なのは、and の前の動詞句の表すイベントが後の動詞句の表すイベントよりも時間的に先行するという解釈が与えられるために、その文が想像しがたい事態を表していると理解せざるを得なくなるためである。

6. 二つの等位項が表すイベントの間に時間的な前後関係が含意されないという解釈も同様に可能である。
7. (13) や (14) の例についても、イベントの順序ではなく、参加者の性質や場面の条件などが関与しているとも考えることもできる。
8. スキーマ、フレーム、スクリプトは、完全に同一の概念ではない。それらの間の相違については、Brown & Yule (1983), Eysenck & Keane (1995), Gleitman (1996) を参照。
9. スキーマやフレームは典型的イベント連鎖のみを表示するとは限られない。例えば、あるタイプ物体（例えば、部屋）の典型的性質を表示するものもある。物体の典型的性質を示すスキーマが、言語表現を動機付け、制約している例もある。これについては、Matsumoto (1996c) を参照。
10. 本論で取り上げたものの他にも、特定の構文が、その機能と関連した認知的基盤を持っており、そこから派生する概念的な制約を受けることがあることが報告されている。例えば、Matsumoto (1996a, 1996b) を参照。

参考文献

- Brown, G. and G. Yule. 1983. *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
 Bruce, Les. 1988. Serialization: from syntax to lexicon. *Studies in Language* 12, 19-49.

- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff. 1997. Semantic subordination despite syntactic coordination. *Linguistic Inquiry* 28, 195-217.
- Deane, Paul D. 1991. Limits to attention : a cognitive theory of island phenomena. *Cognitive Linguistics* 2. 1, 1-63.
- Deane, Paul D. 1992. *Grammar in Mind and Brain : Explorations in Cognitive Syntax*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- Durie, Mark. 1997. Grammatical structures in verb serialization. In Alex Alsina, Joan Bresnan, and Peter Sells (eds.), *Complex Predicates*. Stanford, CA : CSLI Publications, 289-354.
- Eysenck, Michael W. (ed.) 1990. *The Blackwell Dictionary of Cognitive Psychology*. Oxford : Blackwell.
- Eysenck, Michael W. & Mark T. Keane. 1995. *Cognitive Psychology A Student's Handbook*. 3rd edition. Hove : Lawrence Earlbaum.
- Gleitman, Henry. 1996. *Basic Psychology*. 4th edition. New York : W. W. Norton & Company.
- Johannssen, Janne Bondi. 1998. *Coordination*. Oxford University Press.
- Lakoff, George. 1986. Frame semantic control of the Coordinate Structure Constraint. *CLS 22, Part 2: Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory*. Chicago : Chicago Linguistics Society, 152-167.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 2 : Descriptive Applications*. Stanford, CA. : Stanford University Press.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Matsumoto, Yo. 1996a. Subjective motion and the English and Japanese verbs. *Cognitive Linguistics* 7, 183-226.
- Matsumoto, Yo. 1996b. How abstract is subjective motion? A comparison of coverage path expressions and access path expressions. In Adele E. Goldberg, (ed.) *Conceptual Structure, Discourse and Language*. Stanford, CA. : CSLI Publications, 359-373.
- Matsumoto, Yo. 1996c. Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In Gilles Fauconnier and Eve Sweetser, (eds.) *Spaces, Worlds, and Grammar*. Chicago : The University of Chicago Press, 124-156.
- Matsumoto, Yoshiko. 1997. *Noun-Modifying Constructions in Japanese : A frame-semantic approach*. Amsterdam : John Benjamins.
- Michaelis, Laura A. 1998. *Aspectual Grammar and Past-Tense Reference*. London : Routledge.
- Ross, John R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. unpublished Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Ross, John R. 1986. *Infinite Syntax!* Norwood, NJ : Ablex.
- Stillings, Neil A., Steven E. Weisler., Christopher H. Chase., Mark H. Feinsten., Jay L. Garfield., & Edwina L. Rissland. 1995. *Cognitive Science : An Introduction*. 2nd edition. Cambridge, MA. : MIT Press.